報　文

青年期の子どもの出生順位と母親への感謝，および対人行動との関連
－大学生女子を対象として－

倉　岡　理　保*1　　平　田　裕　美*2

Birth Order, Feeling of Gratitude to Their Mothers, and Interpersonal Relations in Adolescents
－ For Female College Students －

Riho KURAOKA*1 and Hiromi HIRATA*2

The present study was conducted to examine whether the birth order was related to adolescence gratitude to their mothers and interpersonal relations. Analysis of questionnaire responses of 117 female college students revealed the following results:

(1) The youngest had the most grateful feelings to their mothers than the eldest and second. The second were not thankful to their mothers from the youngest to the eldest.

(2) The youngest were able to understand people more positively than the eldest and second.

(3) The youngest were most satisfied with their birth order; therefore the eldest were not satisfied with their birth order.

As mentioned above, the birth order influenced the daughters' feelings of gratitude to their mothers, and their interpersonal relations. The results confirmed that the adolescence interpersonal relations had significant correlation with parenting and siblings. These findings confirmed the previous reports data.

Ⅰ．問題と目的

対人関係と人格形成の基礎となる家族に着目した研究は多い。子どもと養育者という視点では，対人関係の形成に寄与する理論として，アタッチメントにおける内的ワーキングモデルなどが挙げられる（Bowlby[2]）。一方，子どもときょうだいという視点からの検討は非常に少ない。理由として，白佐[5]は，きょうだい関係の軽視，研究の困難さ，間接的な影響の多さを挙げている。しかし，長子，次子，末子的性格と関連する出生順位と個々の人格や対人関係の取り方，知的能力との関係については，古くから議論の対象として，現在も活発に検討されている（例えば，Kristensen & Bjerkedal[13] 岡野 他[15] Sulloway[18] Zajonc & Sulloway[20]）。

では，同じ親に育てられたにも関わらず，なぜ出生順位により人格や対人関係に違いがあると言われているのだろうか。

1）出生順位に基づく「親の養育」

白佐[4]は，親のきょうだいへの序列観に「長幼の序」思想が影響しているのではないかと指摘している。この点について，磯崎[9]の小学生・中学生を対象とした調査では，ものもち（物をたくさんもっている），能力（いろいろなことができる），成績に「長幼の序」傾向が見られていた。平林・藤谷[7]は，長子は自制的，末子は依存的で負けず嫌いなど出生順位による人格特徴を明らかにし，内田・渕上[19]も，出生順位に基づいた親の養育が成人後の適応感に影響していたことを報告している。同じ親の元で育った（同環境生育）きょうだいにおいて，このような差異が生じていることから，出生順位に照ら

*1 埼玉県　朝霞市立朝霞第五小学校：Asaka Daigo Elementary School, Asaka City, Saitama
*2 発達臨床心理学研究室，女子栄養大学：Developmental Psychology, Kagawa Nutrition University

し合わせた親の養育に対する子どもの受け止め方が，その人格や対人関係に影響していると思われる。

2）きょうだい関係と子どもの「自己認知」

親と子どものみではなく，きょうだいという関係も含めて捉えた場合では，きょうだい間の諍いにおける親の対応や互いの呼称などが，子どもの出生順位に基づく（例えば，期待される長子としての）自覚に影響していた（桜井・神澤[17]）。親の子どもへの役割期待が，きょうだいにおける，互いの「まなざし」を媒介して，その期待に応えようとする子どもの「自己認知」を強化していると考えられる。この傾向は，Kramer & Kowal[12]の乳児期から青年期の子どもを対象とした，きょうだいにおける互いの関係の受け止め方と友人関係との関連においても同じ様に見出されていた。長子や末子に挟まれ，その分，親からの期待が希薄になるため，中間子は自己放任的な傾向に陥りやすい（浜崎・依田[6]），女子の長子が他のきょうだいよりも養護性における技能が最も高いという見解（楜澤・福本・岩立[14]）からも，きょうだいにおける互いの「まなざし」は，性別も含めて，出生順位が人格形成に及ぼす影響要因として重要であると言えるだろう。

3）対人関係との関連

大谷[16]は，高校生・大学生の表面的，または周囲に合わせるという付き合い方と対人葛藤状況への対処との関連を検討することによって，表面的な付き合いに止めるより，表面的な関係すら切り捨てる者の方がストレスをより抱えていたと述べている。人との関わりを持たないほうがストレスを感じやすいと理解される。子どもへの養育者の関わり方，出生順位によるきょうだい間の相互作用のあり方が，そのまま対人関係の取り方につながるという示唆[3]を併せて考えると，互いのきょうだいの存在こそが対人関係の取り方に影響していると推測される。Kennedy & Kramer[10]による感情制御ときょうだいにおける対人関係との関連では，きょうだいの存在がそれぞれの対人関係の取り方に影響していた。相川[1]も，きょうだい構成と社会的スキルの獲得の程度には違いが認められたが，予測と反して，感情を統制するスキルについては，長子は一人っ子よりも低いが中間子よりも高かったと報告している。

「少子化の進む今日的状況において，改めてきょうだいの持つ意味を問い直す必要がある」という警鐘[9]，社会的スキル不足の原因の一つとして，少子化を挙げている見解[11]から，本研究でも，親の養育に対する子どもの受け止め方，きょうだいにおける互いの「まなざし」，そして対人関係の取り方に，出生順位により違いが見られるのかどうかを検討する必要がある。しかし，これまでに共通して見られる「子どもの受け止め方」については，認知，行動，言語コミュニケーションなど，非常に広範囲な捉え方がなされていることが窺えた。この点について，池田[8]は，青年期の子どもの母親に対する4種類の気持ちを確認し，学校段階で群分けをした検討の結果，中学生では「母親への要求」，高校生では「母親に負担をかけたことへのすまなさ」，大学生では「援助してくれることへのうれしさ」が他の群よりも高かったという発達的変化からの見解を示している。このことから，大学生にあたる青年期後期では，母親への感謝の気持ちが安定してくると予測される。そこで，本研究は，男子より女子の方が過去の被養護体験による影響を受けやすいという知見[14]を踏まえて，青年期後期にあたる大学生女子を対象に，①出生順位と母親への感謝，②出生順位と対人関係の取り方，そして，出生順位ときょうだいにおける，互いの「まなざし」に着目して，③今の出生順位で「得をした／損をした」感覚を要因として，長子，中間子，末子に差異が見られるのかどうかを検討する。

仮説：大学生女子の出生順位（長子・中間子・末子）により，母親への感謝，対人関係の取り方，互いの「まなざし」には差異がある。

Ⅱ．方　　法

調査協力者

関東に所在する女子大学生117名（平均年齢19.62歳。調査期間：2009年12月）。実施は，大学授業時に，無記名式の質問紙調査を配布・回収した（回収率100％）[1]。

調査項目

項目は，「母親に感謝しているときに感じる気持ち」尺度[8]の「援助してくれることへのうれしさ」に関する項目，「友人関係新規」尺度[16]とフェイスシートから成立する。各項目の説明を以下に示す。

「援助してくれることへのうれしさ」

青年期後期の子どもの母親への感謝の心理を明らかにするために，池田[8]の「母親に感謝しているときに感じる気持ち」尺度の39項目のうち，大学生群で最も高く示された「援助してくれることへのうれしさ」因子の14項目，「母親は自分が困ったときに助けてくれるのでうれしい」「自分が困ったときには母親が相談にのってくれるのでうれしい」を用いた。これは，母親の行為に素直に感謝する気持ちを示す内容である，予備調査にて，信頼性係数 *Cronbach* の α 係数が .82であったことから信頼性に十分な項目と判断し，母親への感謝を示す項目として選定した。

「友人関係新規」

対人関係の取り方については，大谷[16]の「友人関係新規」尺度を示す20項目を用いた。「友人とは本音で話さない方が無難だ」「友人に自分のすべてをさらけ出すのは危険である」など，本音を出さない自己防衛的な付き合い方を示す「防衛的」6項目，「友人と意見が対立しても，自信を無くさないで話し合える」「友人と本音でぶつかり合っても，自信をなくしてしまうことはない」

[1] 分析においては出生順位の4番目以降は除く予定であったが，そのことは告げずに行った。

など，自分に自信をもって交友する自立したつきあい方を示す「自己自信」5 項目，「どんな友人とも仲良しでいたい」「どんな人とも仲良くしようと思う」など，誰とでも仲良くしていたいというつきあい方を示す「全方位的」4 項目，「友人と本音を言い合うことで，傷ついても仕方がない」「友人と本当の姿を見せ合うことで，少しくらい傷ついてもかまわない」など，自己を開示し積極的に自分のことも理解してもらい，相手のことも理解しようとするつきあい方を示す「積極的相互理解」3 項目を採用した。

回答形式は，全て 6 件法（1. 全く当てはまらない　2. ほとんど当てはまらない　3. あまり当てはまらない　4. やや当てはまる　5. かなり当てはまる　6. 非常に当てはまる）で尋ねた。フェイスシートでは，学年，性別，年齢，現在の住居形態，きょうだい数，きょうだい構成，出生順位，そして「きょうだい全員を足して『100％』とすると，母親に自分は何％気にかけてもらっていると思うか」の記入欄を設け，自己申告での記入を依頼した。また，「もしあなたに気掛かりなことがあった時は，誰に相談しますか」「進路または就職など，重要な決定については，誰に相談しますか」という質問項目については，対象を 1 人のみの選択として依頼した。さらに，今の出生順位に関する感覚として，「きょうだいがいて良かったと思いますか」「今の出生順位で得をしたと思う」「今の出生順位で損をしたと思う」についても問い，同様に 6 件法の回答形式で尋ねた[2]。

Ⅲ．結　　果

今回の調査対象を三人きょうだいに限定しているため，出生順位が何番目かという質問に「4 番目」との回答がされていた（1 名），無回答が見られた（10 名）データを分析から除外し，残りの 106 名を分析対象とした。まず因子分析についてだが，下位因子ごとに信頼性の検討を行った際に，用いるのは既存の尺度なので，改めて因子分析を行うことは必ずしも必要ないと思われた。しかしながら，様々な尺度を利用しているため，因子分析を行う必要もあると考え，データ処理・項目分析について，天井効果，フロア効果に関する検討（$M \pm 1SD$ が最大値，最小値を超える項目）を行った。結果，きょうだいがいて良かったという感覚にて天井効果が見られた。だが，この変数を除去すると本研究の目的から外れる恐れがあるので，そのまま分析に用いることとした。尺度得点は各尺度とも下位尺度で項目数が異なるため，断りのない限り，項目平均値を下位尺度得点として検討した。以下，結果を順次に示す。

1）因子分析の結果

「援助してくれることへのうれしさ」[7] 14 項目について因子分析（最尤法，*Promax* 回転）を施した結果，固有値が急激に落ちるまで，因子負荷量が .40 以上との条件から，2 因子構造であると判断された。しかし，原著が 1 因子であることから，本研究においても，大きく母親への感謝として捉えることとした（以下，「母親への感謝」と示す）。信頼性係数 *Cronbach* の α 係数は .81 と満足のいく値であった。「友人関係新規」[16] 尺度の友人に本音を示さず，自分のありのままの姿を見せようとしない防衛的な関わりを意味する「防衛的」6 項目，どの人とも同じように仲良く付き合っていたいという関わりを意味する「全方位的」4 項目，自信をもって，自立した人との付き合いを意味する「自己自信」5 項目，自己開示し，積極的に人と互いに理解しようとする付き合いを意味する「積極的相互理解」3 項目について，因子分析（最尤法，*Promax* 回転）を行った結果，固有値が急激に落ちるまで，因子負荷量が .40 以上との条件から検討すると，原著と同様に 4 因子構造であると判断された。し

Table. 1　母親から「援助してくれることへのうれしさ」についての因子分析

項	目		共通性
3	母親が自分のことを励ましてくれるのでうれしい	.849	.720
2	自分が困ったときには母親が相談にのってくれるのでうれしい	.834	.695
1	母親は自分が困ったときに助けてくれるのでうれしい	.826	.682
5	母親が自分のことを理解してくれていてうれしい	.812	.659
11	今の自分があるのは母親が励ましてくれたおかげだと思う	.799	.639
8	母親が自分のことを心配してくれるのでうれしい	.799	.638
13	自分が今までやってこれたのは母親が応援してくれたおかげだと思う	.778	.605
4	母親は自分が困ったときに助言してくれるのでうれしい	.774	.598
12	今の自分があるのは母親が自分のことを信頼してくれたおかげだと思う	.770	.592
10	母親が自分の味方でいてくれるのでうれしい	.769	.592
6	母親が自分のことをほめてくれるのでうれしい	.764	.584
7	母親が自分の生き方を理解してくれていてうれしい	.756	.571
14	自分が今までやってこれたのは母親が見守ってくれたおかげだと思う	.716	.513
9	母親は自分に対してやさしく接してくれるのでうれしい	.694	.482
	寄与率（%）		45.39
	Cronbach の α 係数		.81

[2] この調査は，日本応用心理学会倫理綱領に従い実施した。調査協力者には，事前に文書と口頭で本研究を行う目的の説明を行い，その意思に基づいて参加の中断，あるいは拒否ができること，それによって調査協力者の不利益にならないことについての説明を行った。さらに回答されたデータ情報の秘密保持の厳守，データ結果の公開に同意の意思が無い場合は×の記載をお願いした。調査実施後に，日程を取り決め，在学時の研究室にて本調査に関する質問を受け付けることを黒板に板書した。

Table. 2 「友人関係新規」についての因子分析

	項　　目	防衛的	自己自信	全方位的	積極的相互理解	共通性
2	友人と本音で話すのは避けている。	**.936**	.078	.104	.002	.794
1	友人にはありのままの自分は出せない。	**.862**	.142	.020	.076	.684
5	友人とは本音で話さない方が無難だ。	**.708**	.056	.085	.033	.559
4	友人に自分のすべてをさらけ出すのは危険である。	**.649**	.226	.021	.038	.522
3	傷つきたくないので友人には本当の姿は見せられない。	**.561**	.164	.099	.017	.418
6	友人とは，互いに傷つくような本音では話さないようにしている。	**.527**	.054	.135	.274	.410
9	友人と本音でぶつかり合っても，自信をなくしてしまうことはない。	.063	**.925**	.063	.106	.863
8	友人と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない。	.100	**.862**	.020	.080	.773
10	友人と意見が対立しても，自信を無くさないで話し合える。	.062	**.845**	.011	.089	.721
11	友人と意見を交しあっても，それほどまどわされない。	.023	**.670**	.067	.098	.449
12	みんなと意見が違っても，できるだけ自分の意見を言うようにしている。	.076	**.521**	.155	.067	.310
15	どんな人ともずっと友達でいたい。	.054	.081	**.832**	.017	.688
13	どんな友人とも仲良しでいたい。	.056	.049	**.832**	.198	.587
16	どんな友人とも強調し合いたい。	.097	.054	**.786**	.133	.693
14	どんな人とも仲良くしようと思う。	.092	.090	**.739**	.163	.766
19	友人と本当の姿を見せ合うことで少しくらい傷ついてもかまわない。	.006	.017	.020	**.921**	.837
18	友人と本音を言い合うことで傷ついても仕方ない。	.012	.072	.032	**.802**	.601
20	友人とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい。	.055	.039	.104	**.724**	.662
	寄与率（%）	45.39				
	Cronbach の α 係数	.88	.89	.88	.89	
	因子間相関	−.201	.025	.529		

Table. 3　各尺度の基本統計量と *F* 検定

変　　数	出生順位 長子 (n＝38) Mean	SD	中間子 (n＝18) Mean	SD	末子 (n＝50) Mean	SD	合計 Mean	SD	分散分析 *F*
母親への感謝：「援助してくれることへのうれしさ」	4.79	0.75	4.42	1.04	5.00	0.70	4.65	0.91	3.48*
防衛的	3.01	0.83	3.19	0.98	2.79	0.81	3.06	0.90	1.36
自己自信	3.78	0.93	3.61	0.98	3.31	1.15	3.62	1.00	1.36
全方位的	4.12	1.01	4.16	1.11	4.56	0.72	4.21	1.02	1.25
積極的相互理解	4.17	0.89	3.83	1.03	4.50	0.76	4.07	0.96	3.75*
きょうだいがいて良かった感覚	5.18	0.95	5.10	1.18	5.72	0.57	5.24	1.04	2.52
出生順位で得をした感覚	3.89	1.29	4.32	1.43	4.89	1.32	4.26	1.40	3.31*
出生順位で損をした感覚	3.68	1.38	3.02	1.39	2.50	1.76	3.17	1.50	4.56*

*p＜.05

かし，項目17「友人と分かり合おうとして傷ついても仕方ない」，項目 7「友人には自分の考えていることを全部言う必要はない」は，因子負荷量が低いため分析から除外した。再度，因子分析（最尤法，*Promax* 回転）を施した（Table 2）。信頼性係数 *Cronbach* の α 係数は，防衛的因子は .88，自己自信因子は .89，全方位的因子は .88，積極的相互理解因子は .89 と満足のいく値であった。

2）分散分析の結果

「母親への感謝」「防衛的」「自己自信」「全方位的」「積極的相互理解」，出生順位（1＝長子，2＝中間子，3＝末子）を参加者間要因とする一元配置分散分析，および *Tukey* の下位検定を施した結果を，各尺度得点の平均値と標準偏差 SD を含めて示す（Table 3）。

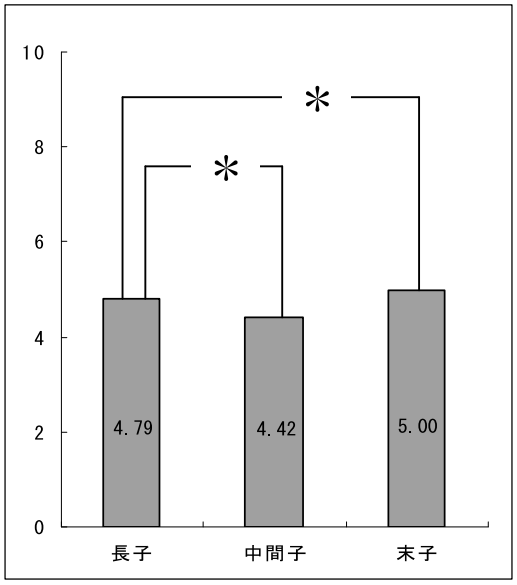
母親への感謝（$F(2,103)=3.48$，$p<.05$），積極的相互

理解（$F(2,103)=3.75$, $p<.05$），出生順位で得をした感覚（$F(2,103)=3.31$, $p<.05$），出生順位で損をした感覚（$F(2,103)=4.56$, $p<.05$）において，それぞれ出生順位の主効果が有意であった。*Tukey* の下位検定では，母親への感謝では，中間子より長子の方が母親に感謝しているが，長子より末子の方が母親に感謝していた（Figure 1）。積極的相互理解においても同じ傾向が見られた（Figure 2）。出生順位で「得をした」感覚では末子が最も高く，「損をした」感覚は長子が最も高かった（Figure 3, Figure 4）。さらに，出生順位により，相談相手（気がかり）や相談相手（重要）の回答に偏りがあるのかを検討するため，χ二乗検定を行った。

結果，相談相手（気がかり）（$\chi^2(14)=13.20$, *n.s.*），相談相手（重要）（$\chi^2(18)=10.69$, *n.s.*）ともに有意な差は見られなかった。よって回答の偏りはなかったことが確認された。

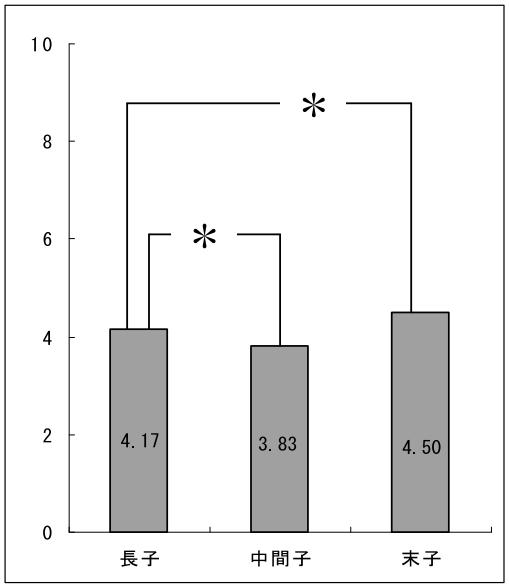
IV. 考　　察

本研究では，①出生順位と母親への感謝，②出生順位と対人関係の取り方，そして③今の出生順位で得をした／損をした感覚において，長子，中間子，末子に差異があるのかどうかを検討した。①出生順位と母親への感謝



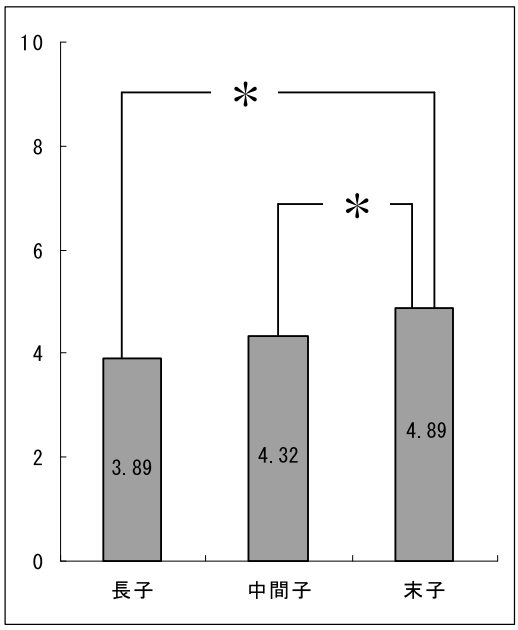
＊＜.05

Figure 1.　母親から「援助してくれることへの嬉しさ」



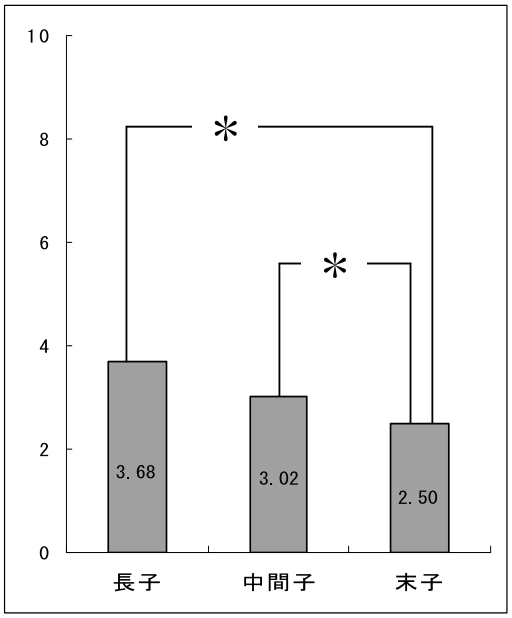
＊＜.05

Figure 2.　積極的相互理解



＊＜.05

Figure 3.　出生順位で得をした感覚



＊＜.05

Figure 4.　出生順位で損をした感覚

では，末子が最も母親への感謝の気持ちが高く，次いで長子，中間子という順で母親への感謝の気持ちが低くなっていた。中間子は長子，末子より，母親への感謝の気持ちが低いということが理解された。

これは，浜崎・依田[6]の見解にも見られるように，親から期待されていないという不安感から家庭における居場所を失い，それゆえに母親への感謝の気持ちが低くなったのではないかと考えられる。また，末子が長子，中間子に比較して一番感謝していたのは，Adler[15]の見解にも見られるように，末子は，他のきょうだいより，母親に手をかけてもらえる機会が多いため，その分，他のきょうだいよりも感謝の気持ちが強く表れたと思われる。いずれも，出生順位による母親の対応の違いが子どもの母親への感謝に反映されたと解釈できるだろう。**②出生順位と対人関係の取り方では**，末子が最も積極的に相手を理解しようする気持ちが高く，次いで長子，中間子という順であった。中間子は，前述の母親への感謝の気持ちと同様に，長子，末子と比較して，積極的に相手を理解しよう，してもらおうとしないことが窺える。中間子は集団においても自分の居場所をうまく見つけることができず，そのため，自分自身をさらけ出してまで積極的に相手を理解しようとはしないと考えられる。先行研究における「自己放任的な傾向」[6]が，本稿でも認められたと言える。一方，末子は長子，中間子より積極的に相手を理解しようとしていた。末子は家族の中の最年少という立場から，可愛がられる傾向にあるため，対人関係においても積極的に相手と関わり，理解しようとするのではないかと思われる。最後に**③今の出生順位で得をした／損をした感覚では**，末子が最も自分の出生順位に満足し，長子が最も自分の出生順位に満足していなかった。長子であるがゆえに，年齢が下のきょうだいに「譲る」など，長子として我慢しなければならない状況が考えられる。いずれも，先行研究の知見と一致する結果であったと言えよう。以上から，大学生女子の出生順位（長子・中間子・末子）により，母親への感謝，対人関係の取り方，互いの「まなざし」には差異があるという仮説は採択された。

本研究の結果より，出生順位に基づく親の役割期待は，きょうだいにおける互いの「まなざし」を媒介して，子どもの対人関係の取り方に反映されると解釈された。もし，長子や中間子に，より良好な対人関係を築いて欲しいと考えるならば，親が出生順位に基づく態度，言動に留意していくことが一案として挙げられるだろう。しかし，今回の尺度において出生順位による有意な差が見出されなかった項目もあった。出生順位よりも，現在の状況，個人の特性など，様々な要因が影響したのではないかと推測される。発達的視点から，きょうだいの年齢間隔や性別に着目した縦断的研究デザインの模索を今後の課題としたい。

本研究は，女子栄養大学保健栄養学科（保健養護専攻）に提出した卒業論文（2009年度）に加筆・修正したものです。本論文の一部は，2010年9月，日本応用心理学会第72回（京都大学）にて発表しました。

参考文献

1) 相川　充：きょうだい構成が子どものソーシャルスキルの程度に与える影響．東京学芸大学紀要，総合教育科学系Ⅰ **61**，91-105（2010）
2) Bowlby, J.: Loss: sadness and depression., Attachment and loss, Vol.3. Basic Books. New York（1980）
3) 福島　治：家庭の人間関係．相川　充・高井次郎（編著）コミュニケーションと対人関係，p212-230，誠信書房，東京（2010）
4) 白佐俊憲：きょうだい関係とその関連領域の文献集成Ⅲ．川島書店，東京（2004）
5) 白佐俊憲：きょうだい研究の動向と課題．日本児童研究所（編）児童心理学の進歩，p57-84，金子書房，東京（2006）
6) 浜崎信行・依田　明：出生順位と性格（2）；3人きょうだいの場合．横浜国立大学紀要，**25**，187-196（1985）
7) 平林　進・藤谷貴代：出生順位と性別構成による性格について．名古屋女子大学紀要，人文・社会編，**48**，75-85（2002）
8) 池田幸恭：青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析．教育心理学研究，**54**(4)，487-497（2006）
9) 磯崎三喜年：出生順位と性がきょうだい関係の認知と自己評価に及ぼす影響．社会科学ジャーナル，203-221（2007）
10) Kennedy, D.E., Kramer, L.: Improving emotion regulation and sibling relationship quality: The more fun with sisters and brothers program. Family Relations, **57**, 567-578（2008）
11) 小林正幸：序文なぜいまソーシャルスキルか．小林正幸・相川　充（編著）ソーシャルスキル教育で子どもが変わる：小学校．p3-7，図書文化社
12) Kramer., Kowal, A.: Sibling relationship quality from birth to adolescence: The enduring contributions of friends. Family Psychology, **19**, 503-511（2005）
13) Kristensen, P., Bjerkedal, T.: Explaining the relation between birth order and intelligence. Science, **316**, 1717（2007）
14) 楜澤令子・福本　俊・岩立志津夫：大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性（nurturance）へ及ぼす影響．教育心理学研究，**57**(2)，168-179（2009）
15) 岡野守也：アドラー心理学への招待．金子書房，東京 p44-56（2004）
16) 大谷宗啓：高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切り替え－心理ストレス反応との関連に注目して－．教育心理学研究，**55**(4)，480-490（2007）
17) 桜井良之・神澤　創：青年期におけるきょうだい関係と精神的健康について．日本応用心理学会第76回論文集，114（2009）
18) Sulloway, F.J.: Born to rebel: Birth order, family dynamics, and creative lives. Academic Press. New York（1996）
19) 内田利広・渕上麻紀：きょうだい間の比較の体験と出生順位が自己実現に及ぼす影響について．家族心理学研究，**9**(2)，103-112（1995）
20) Zajonc, R.B., Sulloway, F.: The confluence model: Birth order as a within-family or between-family dynamic? Personality and Social Psychology Bulletin, **33**, 1187-1197（2007）